

自著と
その周辺

臨床病理検討会の進め方・活かし方

総編集：青笹克之，菅野祐幸
分担編集：長沼 廣，松原 修，手島伸一
中塚伸一，岡 一雅，谷本昭英

中山書店
222頁
2016年8月10日発行
定価10,000円＋税

2011年8月に信州大学医学部病理組織学教室に着任して以降、まず取りかかったのが医学部附属病院での剖検体制の改革であった。本来熱意を持って剖検に取り組むべき病理専攻医が剖検を負担に感じている様子が見て取れたので、当時の福島医学部長、天野(直)病院長にお願いし、臨床検査部で病理業務に従事する技師を増員していただき剖検全例に技師の介助をつける体制をとった。また臨床検査部病理担当副技師長に協力をお願いし、剖検室の管理運営体制を整備した。剖検受付は原則就業時間内とし、土日祝日も夜間まで引きずることのないよう午前11時までの受付とさせていただいた。時間外の剖検依頼があれば、その必要性について直接私に申し出てもらって私が判断することとし、時間外の剖検を施行する際には私が松本にいるときには私自身が執刀することとした。こうした体制を整備した上で、現在信州大学医学部附属病院では院内剖検全例について、病理専攻医・指導医に対して剖検実施後原則3カ月以内に担当臨床科とのミニCPCの実施を課している。私の側は、CPCの現場で初めて組織像を見て、必要に応じてその場で剖検診断書の修正を指示しているが、分子病理中山教授と分担でその責を果たしている現状である。

そうした改革が軌道に乗り始めた2年前の2014年夏に、大阪大学の病理学教室に在籍していた頃の恩師である青笹先生から本書の企画を打ち明けられて協力を求められた。地域性・専門性を考慮し全国から選んだ分担編集者に依頼して、剖検の意義が明らかな症例23例を取録している。また、冒頭には剖検の現状と教育的なCPCのデザインのモデルも提示している。CPCのレポート提出を課せられている初期研修医のみならず、主に内科系を専攻する後期研修医の諸君、また病理医を志す諸君にも是非目を通していただきたい書籍である。教育研修病院においては、こうした領域の研修医用に医局の図書室に是非備えていただきたい。

臨床家の鋭い確かな観察と臨床病態の考察とともに、病理医の側の個々の臓器診断にとどまらない全身的な病態を見通す病理総論に基づいた組織所見を捉える力があって、はじめて充実したCPCが実現する。近年病理側で力の低下が指摘されているこうした分野の判断の指針となるような症例の選択にも意を用いた。剖検例についての臨床と病理のカンファレンスとしては、本書の序論で取り上げたような教育的CPCのモデルとなる形態に加え、最終剖検診断に到達する前の臨床経過と病理所見を突き合わせるリアルなカンファレンスもある。信州大学医学部附属病院で現在実施している剖検全例についてのミニCPCがまさにこれに相当する。剖検後、臨床サマリーを受領してからの肉眼所見カンファレンスの記録が手元にあるものの、組織所見で診断が変更されることも多々あり、事前に組織標本を見ていない私にとっても覚悟のいるカンファレンスである。

医療現場におけるCPCの重要性については論を待たない。信州大学着任後の2012年4月から始めた全例CPC体制では、診療科によっては必ず教授が出席される診療科もある。特に第一内科の久保前教授にはおおいにCPCを盛り上げていただいた。またこの4年半で時間外の剖検依頼は第三内科からの1例のみであったが、池田修一教授ご自身も剖検に入れられ自ら神経組織を採取しておられた。池田教授からは「病理の教授も剖検に入ることがあるんだね」とお褒め(?)を頂戴した。そして昨年9月末には、このミニCPCが100回に達した。こうした時にこの本が刊行されたことは感慨深いものがある。今後改訂を続け症例を充実させていきたいと考えており、諸兄のご意見・ご指摘をいただければ幸いである。

(信州大学医学部病理組織学教室 菅野祐幸)

